

ジンバブエ 紀行

1 ハラレ到着



石の遺跡をイメージしたハラレ飛行場

福岡、台北、香港、南アフリカ、と乗り継いで目指すジンバブエのハラレに着いたのは何と日本を出て約2日後！ しかし飛行機代を節約しようとするれば、何回も乗り継ぐのを避けられない。

香港から南アフリカのヨハネスブルグまでがもっとも長く、約13時間のフライトだった。「アフリカまで行く人はそう多くはないだろう」との予想はあいにく見事にはずれ、ほぼ満席の状態。

ツーリズムがいかに現代のビッグビジネスなのかがこれでもわかる。

ハラレ空港のロビーに出ると、一週間ほど先に帰国して準備をしてくれていた

アイザックがビデオカメラを回しながら「**Welcome to Zimbabwe!**」とニコヤカに迎えてくれた。

「**Oh, no!**」

三人とも長時間のフライトで髪は乱れ、化粧は剥げ落ち、最悪の状態である。

が、精一杯の微笑を作り答える。

「**Thank you very much!**」

今回の旅はこのアイザックの「自分の国を多くの人に知ってもらいたい」という熱意で実現したようなものである。アイザックは私の英語スクールで昨年の7月より教えている先生だが、自国ではトップクラスのドクター。知識、教養、人格とも優れ、私が一緒に仕事をしてきた外国人の中でも最も信頼が置ける人だ。

空港を出ると真っ赤な日産の日本車が待っていてくれた。この車はアイザックのおばさんから借りたそうだ。まだ新車同然で、こちらではかなりの高級車になるとのこと。

早速そのおばさん (**aunt**)は何をされているか尋ねた。

元郵便局のトップ重役で、リストラで仕事を止め今はフリー、11月から自分でビジネスを始められるので今準備をしている、との事だった。中々パワフルな女性のお会いするのが楽しみだ。

3人の大きなのスーツケースを荷台に載せて、さあトラベリングの始まり！
空は乾季で雲ひとつなく、太陽の光が強烈に輝いている8月20日だった。

ジンバブエ 紀行

2 イギリスからの独立



ウサギがジャンプしているイメージで作られている独立記念モニュメント

首都ハラレの空港を出るとすぐ、真っ直ぐに伸びる

メインストリートに出た。

これは市の中心部まで走っており、花崗岩で舗装してある贅沢な道路でいわば国の表玄関だ。

強烈な太陽の光に反射して、一面キラキラと輝いてまるで宝石のように美しい。

両脇にはたくさんのポールが規則正しく並んでいる。

国賓が訪れるときにはこのポールに写真がずらりと飾られるそう。

ここで長時間のフライトの疲れを吹ききるためにも、ちょっとユーモアを試してみた。

成美：**So he (the president) didn't know that we are coming today. There are no pictures of us.**

(大統領は私達が今日来るとは知らなかったのね。私たちの写真が飾ってないもの。)

アイザック：**I forgot to tell him that. But next time I will!**

(彼に言うのを忘れてた。今度は言うておきます。)

おかげで軽快に笑うことができた。やはり英語でないとこの種のユーモアは味わえない。

すぐにアーチ型のモニュメントが目飛び込んできた。

ジンバブエのイギリスからの独立を記念して作られたものだ。

植民地時代から独立へのジャンプをしている兎をイメージして作ってあるそう。

ジンバブエもイギリスの100年に及ぶ支配から抜け出すのには大きな犠牲を払ったようだ。

10年にも及んだ激しいゲリラ戦争。戦死者は約5万人、国民の十分の一にも当たる。

かいらい
傀儡政権からの脱出を目指した最後の1年が特に激しさを増したようだ。

やっと独立できたのは1980年、わずか24年前だ。

ベトナム戦争にも匹敵するこの独立戦争のことを知る日本人は

そう多くはないだろう。

モニュメントの兎のように、高くジャンプして無事に着地できるのを祈らずにはおれない。

ジンバブエ 紀行

3 ホームステイ



ミセスカセンザ家の広いテラスで

海外の旅の大きな楽しみの一つは、その国の人々の暮らしの様子を見ることであろう。

そのためにはホームステイはもっとも有効な手段の一つと言える。

今回はアイザックのおばさんのミセス・カセンザ家にお世話になることになった。アイザックはおじさん、おばさんが無数にいとという感じだが、このミセス・カセンザは自分で不動産会社を営んでいるので、小規模ながらもビジネスをやっている私と話が合うだろうとのアイザックの配慮であった。

現地での2泊目からホームステイは始まった。

家に着いてびっくり！

まるでハリウッドの家のように！

広いキッチン、ダイニングルーム、20畳はあるかと思われる

リビングルーム。庭に目をやるとプールがあり、その反対側には広々とした青い芝生の絨毯じゅうたんが広がっている。

ゲートに車が着くと、早速ガーデナー（庭師）が門を開けてくれた。中流以上の家庭では住み込みのガーデナーに、またメイドを2人ほど雇うのはごく普通であるらしい。

玄関でお互いに抱き合いながら歓迎の挨拶をした。

*** Welcome to Zimbabwe! Welcome to my house !**

*** Thank you ! Nice to meet you !**

お決まりの西洋式歓迎の仕方なのは、この国が100年もの間イギリスから植民地支配されていたことを思わせる。金持ちになればなるほど西洋式ライフスタイルの傾向が強いのだそう。髪をひし形模様に編みこんでセンスの良い服を着た、体格の良いミセス・カセンザにギュッと抱きしめられて、私達のリアルなアフリカの生活体験が始まった。

ジンバブエ 紀行



ミセスカセンザ家に滞在していた女の子達と

ミセス カセンザのお宅には合計 **6** 人の子供達がいて賑やか
だった。

でも全員が彼女の子供というわけではない。もう大人の自分の娘を除いて、あと **5** 人は全員が自
分の兄弟の子供達なのだ。下は

6 歳から上は **17** 歳の高校生までこの家で面倒を見てもらっている。

親達はジンバブエの経済がよくないので、イギリスに出稼ぎに
行っているとの事だそうだ。

また両親を失くした子供や、片親を失くした子もいた。理由は
聞くに聞けないので解らない。

西洋文化では、そういう個人的な事柄は本人が自分から言わない限りあまり聞かないことになっ
ている。

その分、自分達も「いくつ?」とか「子供はいる?」、「結婚してる?」などの個人的な質問
は、まず聞かれることがないので、

気が楽なことも多い。

ここの大勢の子供達は、初めての日本人のお客に本当に興味を

持ったようだった。

特に **12** 歳になる二人の女の子達は、暇さえあれば私達の部屋に来て過ごした。そのうちに私の持ち物なども何がどこにあるか全部覚えてらしく、ある朝私が化粧品の入ったポーチを探していると、

子供) “ **What are you looking for ?** ”

(何を探してるの)

成美) “ **I am looking for my cosmetics.** ”

(化粧バッグを探してるんだけど)

子供) “ **Is it this ?** ”

(これ?)

と言ってサッと差し出してくれたのには驚いた。

ここの子供達とはドッジボール、折り紙、陣取り、歌、などの両国の文化交流を存分に楽しんだ。

やはり子供達は好奇心と吸収性と柔軟性に富み、「地球市民」という言葉がピッタリだ。

ジバブエ 紀行



小学校で日本について説明をする

子供) "Do you want to go to see our school?"

(私達の学校を見に行かない?)

ある朝、ミセス カセンザの家に住んでいる **12** 歳の二人の女の子達が輝く瞳で誘ってくれた。

「学校訪問」は普通の旅行ではなかなか実現しないので、二つ返事で **OK** を出した。

あいにく末廣さんは前日の村訪問で疲れ切っていて、家でゆっくり休養することになった。

この女の子達は日本では小学校 **6** 年生にあたり、**9** 月からの中学進級に備えて夏休みの特別授業があっているということだった。

学校は裕福な家の子供達が通う私立の学校で、行ってみると庭もきれいに整備されていて、なかなか良い学校のようにだ。

体格の良い、迫力のある女性教師たちに笑顔で歓迎されて、教室に入った。

子供達の好奇の目が逸見さんと私にいっせいに注がれる。公立学校には制服はないが、ここは私立なので皆制服を着ている。こういうところも本当にイギリス的である。

良く見ると、3人だけが襟のところに赤いラインの付いたジャケットを着ている。

後で解った事だが、これはクラスでトップの生徒の一人にはラインが一本、2位の生徒の二人にはラインが2本付いているジャケットを特別に与えられているのだそうだ。

評価の基準は成績だけではなく生活態度、リーダーシップなども重要視されるとのこと。ちなみに、ステイ先の女の子の一人も2位を示すラインが2本のジャケットを与えられていた。どうりで賢くて面倒見が良く、落ち着いているはずだと納得した。

自分の能力を他にはっきりと示してそれを伸ばす．．．能力主義の西洋社会のやり方だと言えるだろう。もしこんなことを日本でやったら、大騒ぎになることであろう。

一通りの自己紹介を終えて、質問がないか生徒に聞いてみた。

しばらくの沈黙の後、手を上げたのはラインが一本のジャケットを着たトップの生徒だった。

●I hear that there are four major islands in Japan. Is that true?

(日本には4つの主な島があると聞いていますが本当ですか?)

これを機に、次から次と手が上がり次のような色々な質問が出た。

● When do children start to learn English ?

(子供達はいつから英語を習い始めますか)

● When do they start school?

(何歳から学校へ行きますか)

● What religion do you believe ?

(宗教は何を信じていますか)

● What is the difference between Buddhism and Christianity?

(仏教とキリスト教の違いは何ですか)

● Do you have ten commandments in Buddhism?

(仏教に十戒はありますか?)

● **We have the Bible. Do you have that kind of thing in Buddhism?**

(キリスト教ではバイブルがありますが、仏教ではそういうものはありますか)

● **Have you ever experienced an earthquake?**

(地震は経験したことはありますか)

宗教関係の本格的な質問が多いのには驚かされた。でもやはり子供、次のようなおかしい質問も出た。

● **You look the same. How do you recognize each other?**

(あなた達は同じに見えます。どうやってお互いを見分ける

んですか)

さすがにこの質問には私も笑ってしまった。

次のように返したら子供達も大笑いをしたので、一本勝ちをしたように感じた。

成美) **I want to ask you the same question.**

How do you recognize each other? You look the same!

(同じ質問をしたいですね。あなた達は皆同じに見えるけど、

どうやってお互いを見分けるの?)

ジンバブエ 紀行

6 村訪問



村の女性達と伝統料理を作って楽しむ

ジンバブエの旅から帰って、もう 2 ヶ月あまりが過ぎた。

時とともに記憶も少しずつ薄らいでいるが、それでもいつまでも新鮮で色あせない思い出というのは、どんな旅にでもある。

今回のそんな貴重な思い出のひとつは、「村訪問」である。

ジンバブエに着いて最初の土曜日に二つの村を訪問する事に

なった。この二つの村は両方ともアイザックの一族、

ゆかり
縁の村である。

ひとつはアイザックのおばさん(たくさんいるおばさんの中の

一人)が所有し、もうひとつは彼のお爺さん所有の村だそうだ。

私達の車が着くと、約 50 人はいるかと思われる人達が、出迎えのために一斉に集まって来た。

「ホーホーホー」と口に手を当てながら、ダンスもしている。

これがアフリカの伝統的な歓迎の仕方なのだそうです。

私達も、見よう見まねで「ホーホーホー ！！」。

ダンスもディスコ感覚で楽しんだ。女性達がとても明るくて元気が良いのが印象的だ。

歓迎のダンスが一息ついた後、皆でトンガリ屋根のついた丸い

レンガ作りのキッチンに入った。

お客様をキッチンで一緒に料理などをしながらもてなすのが、

伝統的なやり方という事だった。

薄暗いキッチンの中では、中央に囲炉裏があり火が燃えていた。

これから作るのは、白いトウモロコシの粉を練ったサザという

ものだ。

お湯を沸かすために、枯れ枝をたくさん加えたとたん、煙が

モウモウと上がり咳き込んでしまった。

それを見て皆が喜んでいる。

もっと喜ばせようと、口に手を当てて「ホーホーホー！」と言ったら皆が大笑いをした。

サザのおかずは、ついさっきまで元気に歩き回っていたチキンのシチューだそうです！

” **So delicious !!** ” (とてもおいしい)

と言う以外に選択肢はない。実際、新鮮なチキンの味は本当に

美味だった。

食事を皆で楽しんだ後は、それぞれ出し物をして盛り上がった。

寸劇、太鼓、楽器、．．．どれも伝統的なもので見ていて飽きなかった。

” **It's your turn ! Please do something !** ”

(次はあなた達の番。何かして！)

と言われ、芸のない私達は「むすんでひらいて」を披露した。

小学校の先生をしていた逸見さんのおかげで、リズムを早くしたり遅くしたりして見せたら大いに楽しんでくれた。

心が純朴なのだろうか、皆ほんとうに良く笑うし、表情が良いと思った。

午後の村訪問はもっと盛り上がり、帰途についた頃は大きな

真っ赤な太陽が、果てしなく続く地平線に落ちようとする時刻になっていた。

ジンバブエ 紀行

7 ワイルドライフ



水を飲みにやってきたバッファローの強大な群れ

アフリカと言えば、ワイルドライフ。

野生の象やライオン、キリン等を見ずに帰れるわけではない。

そんな野望(?)を持って乗り込んだのは、世界に名立たる

国立公園「ワング」である。

視界360度に広がる地平線を見渡しながら、果てしなく続く

一直線の道路を車で走る事、7時間あまり。

窓の外はだんだんとジャングルが濃くなって行った。

ライオンは、象は、キリンはどこに？

アイザック曰く、

” There is a plenty of green and food in the jungle.

They don't have to come out here to find their food."

(ジャングルには充分の緑と食べ物があるので、動物達はここまで出てくる必要がないんです。)

「なるほど、そうなのか。だったら明日のサファリに期待するしかないなあ」と思う。

この国立公園はボツワナとの国境沿いに広がり、熊本県ほどの広さがあるジンバブエ最大の国立公園である。

100種を超える野生動物や400種類もの野鳥が住む野生動物の天国なのだ。

公園内にある、予約しておいた豪華なロッジに荷物を降ろすとすぐに、ロッジの敷地内にある野生動物の見晴台へと急いだ。

見晴台のある辺りは、フェンスが張っており、その向こうには

大きな水場が見える。

夕方になるとそこに、野生の動物達が水を飲みにやって来る

との事である。

声を殺し、望遠鏡を覗き続けること約3時間。いつの間にか大勢の人達が集まってきていた。

みんな静まり返っている。こういうところは、西洋人は本当に

マナーが良い...

すると、”

Look! Many many Buffaloes are coming !!"

(見て! バッファローがたくさんやって来る)

おお、何十頭ものバッファローが全速力で水場を目指して走って
来るではないか!

真っ黒な塊かたまりにも見えるほどである。インパラの群れも見える。

見とれていると、誰かが小さい声で、**Elephants"** と教えてくれた。

なんと、5, 6Mしか離れていないところに、象の家族が岩塩を舐めにやって来ていた。

巨大な象が数頭、ユックリ、ユックリ、歩いてくる。これには
私も感動してしまった。

アフリカゾウはインドゾウに比べて一回り大きく、耳が巨大で

ある。その大きな耳のおかげで、50KMぐらい離れた距離でもお互いに音を出し合って交信で
きるということだ。

寿命は60年ぐらいで、秩序ある集団生活ができるし、想像以上に知能が高い動物だそうだ。

この頭が良くて、巨大なアフリカゾウには翌日に乗る機会にも

恵まれた。そのせいか、今私はとてもこの象に興味がある。

帰国してから、図書館などでDVDを見たり、書物で調べたり

したが、まだまだミステリーな部分が多い生き物である。

年に一度、先祖のお墓参りのような事もするという。

岩塩をあまり争うこともなく、順番に従って舐めている様子に見とれていると、いつの間にか辺りは薄暮の色が濃くなってきていた。バッファロー達は、長い距離を走って来たのだろう、ほとんどが黒い岩のような感じで寝転んでいた。

ジンバブエ 紀行

8 サファリ



かわいらしいインパラの群れ

雑誌で見て、どこかに憧れを持っていた白いネットで囲まれた

ベッド…大自然に抱かれたワング国立公園の朝は、
そんなベッド中で目が覚めた。

このネットは日本で言うなら蚊帳である。雨季は蚊が多く

マラリアにかかる危険性もあるので、こういう蚊帳が必要な
だろう。

今日はオープンジープに乗ってサファリを思う存分楽しめる日だ。

全員がジープにそろるといよいよ出発！

早朝のジャングルは空気も超新鮮で、疲れも吹っ飛んでしまい

そう。ジープは風を切りながら、どんどんジャングルの奥地へと進んで行く。

インパラの群れが見えた。

ガイド) **"Now all females are pregnant and they will have babies when the rainy season starts."**

(今、雌は全部妊娠しています。雨季が始まると次から次とベビーが生まれます。)

食料に事欠かない雨季に出産する様に出産のサイクルができて

いるらしい。またこれはインパラに限らず、どの他の動物も同じだそう。雨季はベビーラッシュという事になる。

大きな木も増えてきた。中には鳥の巣が一杯かかっている木が何本もたっている。

ガイド) **"There are lots of nests, but two thirds are fake."**

(たくさん鳥の巣がありますが、3個のうち2個はにせものです。)

敵の目をごまかすために、3個のうちの1個にしか卵を産まないのだそう。生きるための知恵に驚いてしまう。

この鳥はウィーバーバードと呼ばれ、西の方向にだけしか巣をかけないのだそう。昔はジャングルの中で方向を知るのに大いに役立ったという。

ジャングルでは皆生きるために、必死の戦いをしている事を思い知らされる事例は他にもいくつもあった。

例えばモパニという大きな木は、象が近付いて来て近くの木を食べ始めると、おのずと酸っぱくなり象から食べられないように

するのだそうだ。そして象が遠くへ行くと、また元の味に戻るといふのだから感動する。

さらにこの木だけしか食べない虫がいて、この虫は人間がおいしく食べるのだそうで、これもまた面白い。

人間もこんな鳥や木や動物達と同じように、生きるための戦いをしていたはずなのに、我々文明人はいつの頃かそういう

バイタリティは失くしてしまったようにも感じる。

年間3万人以上もの人が自殺をする日本には、このような生きるための原始的バイタリティが欠けているのだろうか。

3時間に及ぶサファリも、珍しい動物や鳥や植物等に感嘆の声を上げている間に終わってしまった。

キリン、象、白サイ、ヒヒ、などの動物も近くに見ることができて満足だった。

ただ残念ながら、ライオンは姿を見せてくれなかった。

ジンバブエ 紀行

9 お別れの夜



楽しいひと時

ワング国立公園、ビクトリア フォールズの観光を終えた私達は、巨大な石造建築で有名なマシゴに泊りして、ホストファミリーの待つハラレへと急いだ。

ミセス カセンザの変わらない暖かい笑顔と抱擁に、長かった旅が無事に終わったことを実感して安心した。子供達も私達が帰るのを待ちわびていたらしく、一時もそばから離れようとしなかったのが嬉しかった。

カセンザ) " The children really like you. Please stay here tomorrow night, if you don't mind."

(子供達があなた達をほんとうに気に入っているのです、最後の夜である明日は、良かったら、ここに泊まりませんか。)

とミセス カセンザが申し出をしてくれて、最後の夜はホテルに泊まるはずであったのをキャンセルしてもう一晩お世話になることになった。ホテル代が一泊分浮くことになって、他の二人もどことなく喜んでいる風だった。

「ちょっと疲れているけど、明日は用意してきた日本食を作って皆さんをお呼びしましょう！」と、目をキラキラ輝かせながら逸見さんと末広さんが提案した。

一度は日本食を紹介したいと思い、3人ともそれぞれ少しずつ用意してきたので、感謝の意を込めて料理をすることになった。

日本から持ってきた材料でできるメニューは、おにぎり、インスタント味噌汁、棒ラーメン、カレー、サラダ。何とも日本食紹介と言うにはおこがましい内容であるが、

仕方がない。炊飯器もなく、鍋なども勝手が違うので要領が悪く、最少は余裕を持って作っていたが、だんだんムードが変わり、後では3人とも笑顔が消え、必死だった。唯一の救いはメイドさんである。全ての洗い物はもちろん、こまごまと実によく手伝ってくれた。

やっと出来上がり、テーブルセッティングをして素敵に盛り付けると、一気にパーティの雰囲気盛り上がる。

3人とも浴衣に着替え、琴の演奏のCDを流して日本の雰囲気を盛り上げた。招待したお客様達は、アイザックのご両親、兄弟をはじめ10人あまりで、とても大きなパーティとなってしまった。

さあ、皆の反応は... 予想通り、海苔を巻いたおにぎりは不評である。それもそのはずで、海草は西洋では肥料なのだから仕方がない。一番気に入られたのはカレーとラーメンだ。これも予想していた通りである。実は日本のカレーは外国人には意外と好評なのだ。スープが多くてシチューに似ているからだろう。ラーメンはどこの国に持って行っても、いつも大好評なのだから面白い。

食事の後は大広間に移って、ダンスやら、歌やら、ゲームやらを皆で楽しんだ。その間、メイドさんは食事の後片付けを一人で済ませていてくれて、本当にありがたく思った。

私もメイドさんを日本につれて帰りたーい」

とついつい思ってしまった。

その事を、ミセスカセンザに言うと、

" You are Ok, because you have a lot of electric machines at home."

(あなた達は電気製品がたくさんあるから大丈夫でしょう)

と言われてしまった。

電気製品も人間の手の働きにはとうてい及ばない。

家事から開放されるには、私も発展途上国に住むしかないのかなあ。

大きな邸宅に住んで、庭師とメイドさんに全ての雑事を任せ、私は仕事に専念する…

そんな暮らしもいいですよねー！

(終わり)

